

美をつくし

大阪市立美術館だより

平成28年9月1日発行



重要文化財 潮干狩図(部分) 葛飾北斎

江戸時代・19世紀 本館蔵(中島小一郎氏寄贈)

遠くに富士をのぞむ浜辺で潮干狩に興じる人々。春の行楽の朗らかな様子が活き活きと描写される。北斎の壮年期を代表する肉筆画で、平成9年(1997)に北斎の作品として初めて重要文化財に指定された優品である。

*開館80周年記念展「臺中之展」(11月8日-12月4日)において、平成26年度の修復後、初公開の予定。

大阪市立美術館開館80周年記念展

こちゅうのてん 壺中之展—美術館的小宇宙

Celebrating 80 Years of Osaka City Museum of Fine Arts | Universe of The Art Museum

2016年11月8日(火) — 12月4日(日)



1



2



4



5



3



6

壺の中には別天地——、『後漢書』方術伝に載るこの有名な故事になぞらえて、80周年を迎えた今秋、本館コレクションと寄託品による「壺中之展」と題した展覧会を開催します。かの主人公のように我々が入り込む壺とは、個々に作品世界をもった美術品、あるいはそれらが組み合わされて織りなす展示空間、ひいては展示の場である美術館です。

大阪市立美術館は1936年(昭和11)5月1日に天王寺の地に誕生しました。開館以来、購入・受贈によって築かれたコレクションは日本・東洋美術を中心としており、その総数は今日約8400件をかぞえ、そのなかには国内外から高く評価される名品も数多く含まれています。また、関西の中核美術館として近隣の寺社などから多くの文化財をお預かりしており、それらの保存・研究はもちろん、展示公開することも美術館の重要な使命です。

本展では、大きく六章に分け、多彩なテーマを設けて作品の魅力をよりわかりやすくお伝えします。コレクション第一号として記念碑的な作品である橋本関雪「唐犬」、修復完了後初披露となる葛飾北斎「潮干狩図」(重要文化財)をはじめ、館藏品と寄託品の中から、国宝・重要文化財を含む選りすぐりの逸品を一挙にご紹介いたします。

美術館に一步踏み入れてみれば、美術のもつ魅力に溢れた小さな宇宙が広がっている——。開館80周年を記念する本展に、是非ご来場ください。

(森橋なつみ)

1. 橋本関雪 唐犬(右扇) 昭和11年(1936) 本館蔵
2. 青磁象嵌 葡萄童子文瓢形水注 高麗時代・12-13世紀 本館蔵(広田松繁氏寄贈)
3. 尾形光琳 燕子花園 江戸時代・18世紀 本館蔵
4. 石造菩薩交脚像龕 北魏時代・5世紀後半 本館蔵(山口コレクション)
5. [伝]李成・王曉 読碑窠石図 元時代・14世紀 本館蔵(阿部コレクション)
6. 銀鍍金透彫 宝相華文経箱 南北朝時代・14世紀 本館蔵(田万コレクション)

◆展示構成

第1章 美術館小史	第1～2室「美術館とコレクション」
第2章 美術鑑賞入門	第3～4室「かたちをたのしむ ^{はまるツボ} 8・0・壺」
第3章 日本美術	第5室「桃山人—肖像画レクイエム」 第6室「洗練華麗の極み」 第7室「爛熟の江戸文化」 第8室「文人趣味と中国への憧れ」
第4章 中国美術	第9室「書韻画情」 第10室「雕刻時光」
第5章 仏教美術	第11～12室「尊 ^{とうと} キモノ」
第6章 近代美術	2階回廊「想い出のおおさか」

◆関連イベント

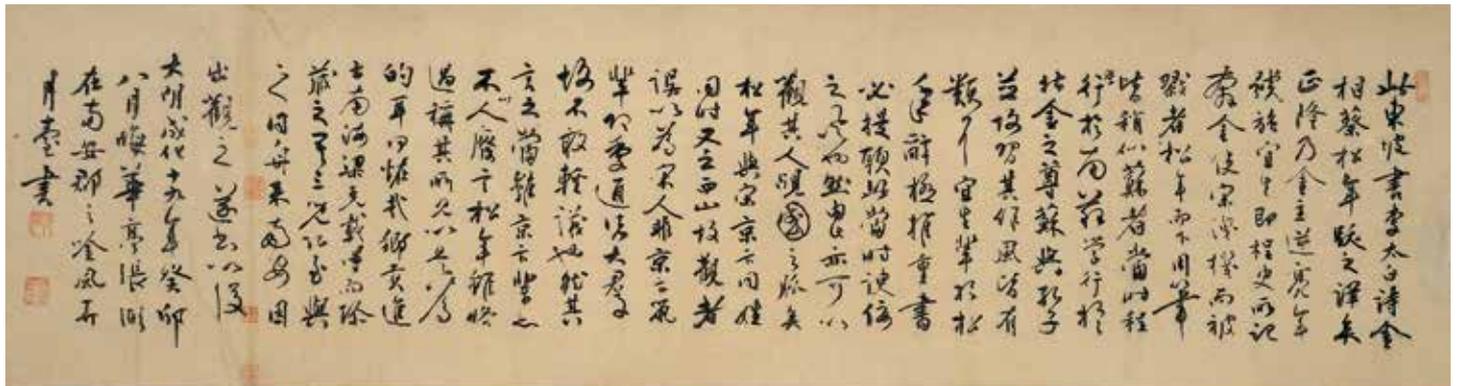
【ギャラリートーク】

会期中の毎土曜・日曜、午前11時から30分程度。各室の展示テーマ(毎回異なる2～3室)について、担当学芸員が見どころをご案内します。

【秋季連続美術講座】

全8回開催。詳しくは本誌裏面(インフォメーション)をご覧ください。

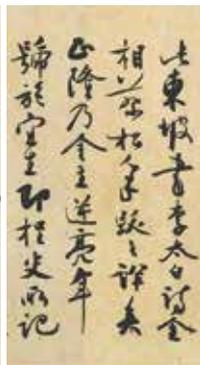
張弼「蘇軾行書李白仙詩卷跋」について



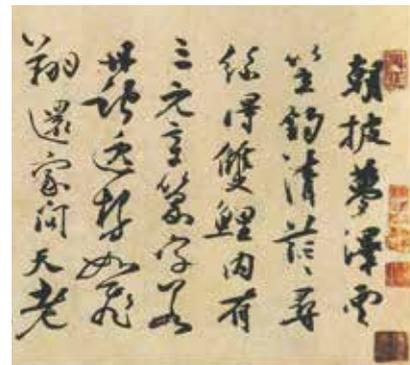
【図1】



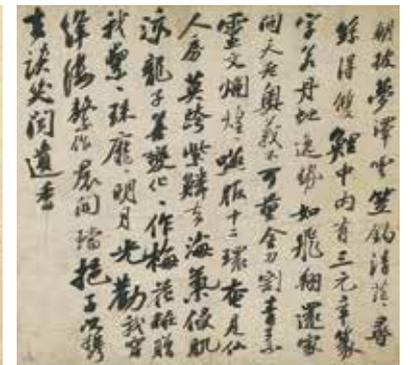
【図4-2】



【図4-1】



【図3】



【図2】

【図1】張弼「蘇軾行書李白仙詩卷跋」
 【図2】蘇軾「行書李白仙詩」
 【図3】張弼「草書李白仙詩卷」 蘇書部分
 【図4-1・2】同 自跋部分(冒頭・末尾)

本館の所蔵する蘇軾「行書李白仙詩」(重要文化財)は、「黃州寒食詩」(台北・國立故宮博物院蔵)とともに蘇書を代表する劇蹟である。また後ろに付された金の蔡松年・施宜生・劉沂・高衍・蔡珪の五人の跋は、金人の書蹟の貴重な遺品としてつとに知られる。これに次ぐのが、ここで取り上げる明の張弼の跋【図1】で、さらに清の高士奇と沈德潜の跋が存する。他に、この卷子の中国での通伝を知る手がかりとなる収蔵印や題簽としては、元の趙孟頫・喬篔成、明の毛晋、清の王鴻緒・劉恕・韓崇・程禎義、清末民初の蘇桂彜・蘇元瑞のものが確認できる。しかしながら、これだけの名品にあっては、思いのほか少ないのが残念である。

張弼(1425-1487)は、字を汝弼といい、東海と号した。華亭(今の上海市松江)の人。江西省南安府の知事となり、賊を壊滅させ、橋梁や道路を整備し、乱れた風俗を教化するなど、大いに治績を挙げて民に慕われた。詩文にすぐれたほか、とりわけ書で名高く、懷素や張旭に学んだ狂草は一世を風靡した。酒酣にして興に乗ると、筆を走らせてたちどころに数十紙を作り、人々はたちまち持ち去ったという。それを想わせる草書作品も遺されているが、本作は明初以来の書風を受け継ぎ、縦逸ながらも規矩を守った行書の逸品である。成化十九年(1483)、南海(広東

省)出身の梁克載が弼の三男の弘至とともに南安に来て、この蘇書を示したと述べている。

ところで、この跋に関連する興味深い作品が伝世している。「草書李白謫仙詩卷」といわれる一点で、現在は天津博物館に蔵されている。その冒頭には、本館蔵蘇軾「行書李白仙詩」巻の本紙【図2】と蔡松年跋の部分がそのまま写されている【図3】。次いで、この後の施宜生以下四段の跋はみな諛辞(へつらいの言葉)なので録さない旨を識し、続けて【図1】の自らの跋を書き留めている【図4-1・2】。最後には、「私はすでに克載のために此の巻に跋し畢ったが、弘至がこれを記録しようと望んだので燭台のもと筆を援った…」とある。

書画録を作成するのであれば、こうした手控えを残す必要があるわけだが、一部を割愛していることから、単に貴重な蘇軾の作品を過眼した喜びを記録して、息子とともに共有したかったのであろうか。蘇書を写すにしても、文字を追うのが主で臨書とは言えないが、書風が若干原典に引きずられるような部分も垣間見える。いずれにしても、名蹟と後代の名家による写しとが共に今に伝わる極めて珍しい遺例である。

(弓野隆之)

妙音の観察

密教法具に見る松虫・鈴虫銘

まだ残暑は厳しいが、それでも天王寺公園が虫の音に包まれる季節になった。虫の音を心地よく感じるのは日本語を母語とする脳の働きによって左脳でこれらの音を理解しているためらしいのだが、この感覚が人類に普遍ではないと説かれても、左右の脳を意識的に使い分けることのできない身としてはこの清けき音色を雑音としてとらえることは難しい。

さて、この虫の音に関わる密教法具についてここでご紹介しておこう。当館が寄託を受ける大阪・高貴寺所蔵の重要文化財・金銅三昧耶形五鈷鈴(右図)は鈴身に三昧耶形をあらわす金剛鈴としては東京・護国寺の品と双璧を成すと謳われる勇壮な作例で、その力強い造形からは想像もつかない高く澄んだ音色



高貴寺 金銅三昧耶形五鈷鈴

を響かせる。そうした音色によるのか、『河内高貴寺縁起』には弘法大師が唐の青龍寺恵果和尚より請来した「松虫宝鈴」と記すが、これを示す箱書等はない。

同様に松虫銘を持つ作例は少なからず存在するようで、箱書や伝承等によって知られる「松虫」および「鈴虫」の銘を持つ金剛鈴をまとめると、その例は表のように十指に余る。なお、「鈴虫」銘の金剛鈴は例外なく「松虫」銘の鈴と対となることは注意されてよいだろう。類例はなおこれにとどまらないはずで、今後の調査を要する。松虫銘の由来をその音色によるものと安易に推測したものの、他の鈴との音の比較という点では形態の比較ほどの例が重ねられているわけではない。銘は多くの場合が後世に付与されたものと考えられ、研究史上さほど重要視されてこなかったようだ。つまり、鈴の持つ本質的価値とは無関係とみなされてきたのだろう。しかし、金剛鈴のもっとも本質的な機能はその鈴が鳴ることであり、本来はその音色にも耳を澄ませ、鈴の持つ価値を判断しなくてはならないはずである。

そんな中、最近奈良国立博物館で信貴山朝護孫子寺の松虫銘金銅五鈷鈴のやや低い音と鈴虫銘銅五鈷鈴の高く澄んだ音がそれぞれの虫の音に対応し、銘にふさわしいとの解説がなされるのを目にする機会があり興味をひかれた。ところが、このスズムシとマツムシについてはその呼称が入れ替わっている可能性が国文学研究の分野を中心に長らく議論されており、鈴の音色と虫の音を比較するには慎重を要する。つまり、唱歌風に言えばチンチロリンと鳴くマ

表 松虫・鈴虫銘金剛鈴一覧

府 県	寺院名	名 称	伝来等	銘
1 埼玉	宝聖寺	銅鈴	平将門調伏祈祷所用	松虫
2 大阪	高貴寺	金銅三昧耶形五鈷鈴	弘法大師請来	松虫
3 和歌山	無量光院	松虫鈴	弘法大師請来	松虫
4 和歌山	成慶院	金銅五鈷鈴	武田信玄遺愛品	松虫
5 広島	西国寺	銅梵釈四天王五鈷鈴	弘法大師請来	松虫
6 広島	龍華寺	銅鈴	弘法大師請来	松虫
7 京都	大通寺	金銅五鈷鈴	弘法大師請来	金琵琶(松虫)
8 京都	大通寺	金銅五鈷鈴	・東寺宝輪院伝来	金鐘児(鈴虫)
9 京都	仁和寺	銅三鈷鈴	伝教大師請来	松虫
10 滋賀	延暦寺	銅三鈷鈴	伝教大師請来	鈴虫
11 奈良	朝護孫子寺	金銅五鈷鈴	命蓮上人所持	松虫
12 奈良	朝護孫子寺	銅五鈷鈴	興教大師所持	鈴虫
13 兵庫	太山寺	金銅宝珠鈴	弘法大師請来	松虫
14 兵庫	太山寺	金銅五鈷鈴	弘法大師請来	鈴虫

ツムシをかつては鈴虫と呼び、リンリンと鳴くスズムシを松虫と呼んでいたのだという。しかも、この名称の転換が歴史上二度起こっている可能性すらあるといい、問題を複雑にしているのだ。

いずれの松虫・鈴虫も命銘の時期は定かではない。銘に関わる一般論としては『満濟准后日記』によると永享六年(1434)にはすでに茶道具に銘が与えられていることが知られ、武具を見れば源氏八領のように甲冑に銘が与えられていたことが『保元物語』はじめ軍記物に頻出することから、遅くとも鎌倉時代中期までには器物に命名(銘)していたことが知られる。器物ではないが、『日本書紀』応神紀に見られる「枯野」や『続日本紀』と『播磨国風土記』の「速鳥」のように船に命名した例が挙げられ、古代より人工物に命名する文化の存したことがうかがえる。今後は松虫・鈴虫銘の命銘時期をも考慮して慎重に議論する必要があるだろう。

密教法具の研究は、美術史・工芸史分野の常道として、まずその形態把握とその比較検討が中心となり、金剛鈴の場合もその例に漏れない。また、宝物館や美術館ではケースの中に展示される。観覧者に許されるのはその色と形、質感などを視覚的に楽しむことであり、音色については想像するよりほかない。実は作品調査の折にも音色についてはほとんど記録がなされていないのが実情で、そもそも文化財保護の観点からも無闇に打ち鳴らすことは憚られるのだが、今後は録音も含めた記録手法の確立が必要であろう。いずれにせよ、音色の違いを意図的に反映させた銘であるのか、単に音色の良いことを虫の音に喩えただけなのか、今後耳を澄ませて調査を続ける必要があるだろう。

音は見ることができない。しかし、調査研究がまとまるまでしばらくの間、ご観覧の皆様にはガラスケース越しに耳を澄ませて見ていただくしかなさそうである。

観音菩薩と申すのは、音を観るとの事ぞかし…

白隠禅師

(児島大輔)

菅橋彦と赤松麟作

2016年10月14日(金)—10月26日(水)

鳥取に生まれた日本画家・菅橋彦(1878～1963)と岡山に生まれた洋画家・赤松麟作(1878～1953)。同じ年に生まれた二人は、幼くして大阪に移り、のちに絵の道を志しました。戦後には、当館付設の美術研究所において、二人とも講師を務めています。分野は異なるものの、近代の大阪を舞台に活躍した二人の画家をあわせてご紹介します。

桜の宮 菅橋彦 昭和30年(1955)
本館蔵(岸田卯兵衛氏寄贈)

小さな妖怪たち

2016年10月14日(金)—10月26日(水)

古来、異界に対する畏怖や慈悲の心により、さまざまな妖怪たちが造形化されてきました。江戸時代の美術の中には、それらを積極的に楽しんでいった様子もうかがえます。「百鬼夜行絵巻」や「化物草紙」をはじめ、版本の挿絵や根付・印籠などに見られる、怪しくもどこか可愛いらしい妖怪たちをお楽しみください。

百鬼夜行絵巻(部分) 原在中
江戸時代・18～19世紀 本館蔵(望月信成氏寄贈)

大阪蔵鏡—中国古鏡の美

2016年10月14日(金)—10月26日(水)

銅鏡は中国工芸の精華です。日本では古くよりこれを珍重してきました。このたび大阪歴史博物館所蔵の中国銅鏡と当館所蔵品とをあわせて陳列いたします。奇しくも大阪に伝来した中国の鏡を通して古代人の世界観や美意識に触れ、愛玩した人々のまなざしを追体験するまたとない機会です。お見逃しなく。

青銅 団華文鏡
隋～唐時代初期・7世紀
本館蔵(田万コレクション)

近年の寄贈作品

2016年10月14日(金)—10月26日(水)

今年、開館80周年を迎えた当館の所蔵作品数は約8,400件を数えますが、近年に収蔵された作品の大半は一般市民からの寄贈によるものです。美術館に寄せられたご厚意、ご支援に対する感謝の気持ちを込めて、2003～2015年度寄贈作品(約700件)の中から一部をご紹介します。

加太瀬戸 田川勤次
昭和45年(1970) 第47回春陽展
本館蔵(田川啓祐氏、田川泉二氏寄贈)

明清～近代の書画

2017年2月18日(土)—3月20日(月・祝)

明清五百年、近代百年。明の建国(1368)から中華人民共和国成立(1949)前夜まで、六百年近くにおよぶ長き時間の中で、中国の書画は実に多様な展開をみせました。時代の機運、場の気風、各人の個性など、様々に関係し合い生み出された作品の数々をご覧ください。

田家秋光図(部分) 倪田
清・光緒29年(1903) 本館蔵

陶芸家・富本憲吉のデザイン

2017年2月18日(土)—3月20日(月・祝)

富本憲吉(1886～1936)は、第1回重要無形文化財(いわゆる人間国宝)の認定を受け、のちに文化勲章を受章した陶芸家ですが、人まねではない独自の模様や造形に終世こだわり続けました。富本憲吉の創作の軌跡をお楽しみ下さい。

染付 辻堂模様方形陶板 富本憲吉
大正14年(1925)
本館蔵(辻本コレクション)

硯箱の世界

2017年2月18日(土)—3月20日(月・祝)

硯箱は、硯・墨・筆・水滴・錐・小刀などの文房具を納める箱。日本では文房具よりも収納する箱に贅をこらし、蒔絵や螺鈿でうたや物語・花鳥風月などの日本的な意匠を施して珍重してきました。硯箱にみる瀟洒な和の意匠をご鑑賞下さい。

和歌浦蒔絵文台・硯箱 山田常嘉
江戸時代・17世紀 個人蔵

天神さま

2017年2月18日(土)—3月20日(月・祝)

菅原道真(845～903)の霊を慰めるためにまつられた天神は、道真が優れた学者であったことから、今も「学問の神様」として広く親しまれています。大阪の佐太天神宮、菅生天満宮、京都の和東天満宮の伝来品を中心に、天神信仰に関わる美術をご紹介します。

厨子入 押絵渡唐天神像 明正天皇
江戸時代・17世紀 大阪・佐太天神宮蔵

所蔵作品の貸出

他館への貸出を予定している当館所蔵作品です。コレクション展ではあまり展示機会がない作品もあります。貸出先館の近くへお出かけの際にはお見逃しなく！展示期間など詳細は各施設にお問い合わせください。

①《象牙彫根付 舌切雀》(カザールコレクション)ほか 計28件

兵庫県立歴史博物館(姫路市)
2016年7月16日(土)～9月11日(日)
「立体妖怪図鑑 一妖怪天国ニッポン part II」



②《十二天像》(田万コレクション)

森美術館(東京都)
2016年7月30日(土)～2017年1月9日(月・祝)
「宇宙と芸術展」



③《豊臣秀吉像》

大阪歴史博物館(大阪市)
2016年9月17日(土)～11月6日(日)
「NHK大河ドラマ特別展 真田丸」



④《染付 山水図花台 湖東焼》(田万コレクション)

滋賀県立陶芸の森(甲賀市)
2016年10月1日(土)～12月11日(日)
「珠玉の湖東焼」



⑤《秋草蜘蛛詩絵硯箱》(カザールコレクション)ほか 計6件

豊田市美術館(豊田市)
2016年10月15日(土)～12月25日(日)
「蜘蛛の糸」



⑥中川一政《自画像》ほか 計2件

和歌山県立近代美術館(和歌山市)
2016年11月19日(土)～2017年1月15日(日)
下関市立美術館(下関市)
2017年1月28日(土)～3月12日(日)
「動き出す! 絵画」



秋季連続美術講座

(開館80周年記念展「壺中之展」開催関連)

- | | | |
|------------|------------------------------|-------|
| ①11月12日(土) | 大阪市立美術館80年の歴史とコレクション | 守屋雅史 |
| ②11月13日(日) | 妙心寺塔頭に伝来する桃山時代の武家肖像画について | 知念 理 |
| ③11月19日(土) | 傅山「燕文貴江山樓觀図跋」をめぐって | 弓野隆之 |
| ④11月20日(日) | 弥勒のすがた—中国・北魏 石造菩薩交脚像龕を中心に | 齋藤龍一 |
| ⑤11月26日(土) | 葛飾北斎「潮干狩図」(重要文化財)をめぐって | 秋田達也 |
| ⑥11月27日(日) | 仏教絵画—聖衆來迎寺蔵「六道絵」(国宝)を中心に | 石川温子 |
| ⑦12月3日(土) | 異形の系譜—大阪・高貴寺所蔵 金銅三昧耶形五鈷鈴を中心に | 児島大輔 |
| ⑧12月4日(日) | 阿部コレクションの宋元絵画 | 森橋なつみ |

時間：各日とも午後1時30分—午後2時30分

場所：美術館1階講演会室 定員：150人

①～⑧とも申込不要 聴講無料 ただし当日の観覧券が必要です。

講座内容、講師が変更になる場合があります。

特別展

木×仏像—樹に祈る、木を彫る (仮称)

2017年4月8日(土)～6月4日(日)

日本は国土の65%以上を森林が占める世界有数の森林国であり、古代より生活のあらゆる場面で樹木の特性と特徴を活かし用いていました。そのなかで、信仰のよりどころとなる仏像も、その多くは木を彫刻することにより生み出されています。1000年以上前の木彫像が今なお日本各地の寺院に安置されているのは、私達にとってあたりまえかもしれませんが、世界的には極めてまれなことです。本展覧会では、樹木の種類や木材の使い方といった素材と技法に注目し、こうした木彫の仏像に込められた人々の思いを探りながらその魅力の再発見を目指します。



木造 菩薩立像 平安時代・12世紀
本館蔵(田万コレクション)

美術館本館の休館について

美術館外壁補修工事のため、2016年12月5日(月)より2017年2月17日(金)まで、本館1・2階展示室を休館します。なお、地下展覧会室はこの間も通常どおり開館しています。

大阪市立美術館 天王寺公園内

Osaka City Museum of Fine Arts

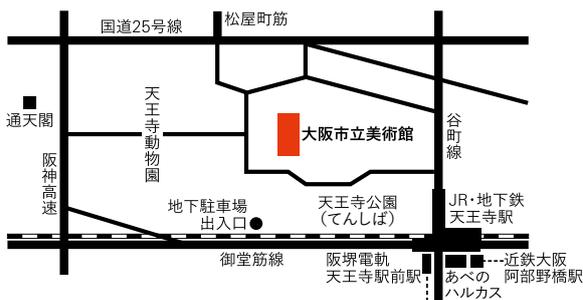
〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-82

tel. 06-6771-4874 fax. 06-6771-4856

<http://www.osaka-art-museum.jp>

開館時間＝9:30～17:00(入館は16:30まで)

休館日＝月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は翌平日)



交通案内：地下鉄御堂筋線・谷町線、JR「天王寺」、近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」、阪堺電軌上町線「天王寺駅前」下車、または市バス「あべの橋」下車、北西へ約400m